

教材名「美しい空の勇者」(学校図書 6年 P54)

内容項目：主として集団や社会との関わりに関すること 主題：勤労、公共の精神

(1) 本教材について

▼自己犠牲を美しくて勇気ある姿だとして描くことで、自己犠牲が「美しいこと」「勇気あること」「正しいこと」だと思ひこませ、たとえ無謀な行為で命を落とすようなことになってしまったとしても、それを褒めたたえることによって、さもそれが「人としてすばらしい姿」であったかのような錯覚を刷り込む教育はとても怖いことだと感じました。自己犠牲を美化するこの教材の視点は、戦争中の軍国主義の精神に通じるのではないかとも思えます。

▼フカのいる海で機長が、出血が激しい足の傷を負った場合の補佐・代行は副機長が行うと航空法で義務づけられていることがこの教材では書かれていません。機長の代わりに最後まで見届ける義務があるのは副機長であり、淵上さんの判断で決めることではないことを子どもたちに知らせた上で、機長や淵上さんの行動の是非を考えさせたいと思います。

▼機長は淵上さんに「…早く脱出しなさい…」と何度も繰り返し叫んだけれど、彼女はそれに対し「乗務員の義務を果たす」ために、乗務員全員の脱出を見届けて海に飛び込んだ、とあります。彼女の言う「乗務員の義務」とは何なのかは本文に書いてありません。副機長がいるのに他の乗務員の脱出を見届けることが淵上さんの義務であるとはどうてい考えられませんか。この場合、指揮統率、判断、意思決定(合意は必要だし、判断が間違っていれば意見を言うべきですが、そのようなことは書かれていません。)は、機長の役割です。緊急時に大切なのは、自分の役割をきちんと果たすことです。「自分がやらなければ」の気持ちで行動することは、返って被害を大きくしてしまうのではないのでしょうか。この教材は子どもたちに自己犠牲を強いる方向に導く危険性があります。航空法の説明をした上で、淵上さんの行動の是非や、自己犠牲について考え議論することが必要です。

(2) 本教材を扱う際に、特に注意すべきだと考えたこと

▼淵上さんの行動を機長は「美しい」「勇気ある」行動だと褒めたたえたけれど、本当にそうなのか、そうでないのか、自由に議論できるようにすることが必要です。「自分がやらなければ」という副題がつく教材名「美しい空の勇者」、それに、『活動』(別冊)の「考えよう」で「ロール機長から、『君は、日本の美しい空の勇者だ』とほめられた時、淵上さんはどんな気持ちだったでしょう。』、『みつめよう』では「自ら進んで仕事をして、それを成しとげた時、どんな喜びを感じましたか。」として、1で考察したような、淵上さんの行為について自己犠牲の是非について考える視点は無く、「自己犠牲の美しさ」に向けて考えを深めさせる構成になっています。

▼ここで、教科書は使わずに読み聞かせをするか、『活動』(別冊)は使わずにプリントにするか、どちらにしても「副題」「最後の3行、機長がほめたところ」は使用しないという選択をすることも考えられます。

(3) 指導過程

	子どもの活動や教師の発問等	留意点
導入	◆送りバントと自己犠牲について考える。	・教師が参考資料1の話をし て、「送りバント」が不本意 な選手や、理解できない国 や文化、考え方があること を知らせる。
展開	◆教材文を読み、淵上さんの行動について考える。 *あわてる乗客に笑顔で冷静で落ち着いて接するのがす ごい *乗客が無事に脱出するための手助けや大きな声での指 示が適切だ *落ち着いて機転のきいた勇気と責任感のある行動がす ばらしい *機長のためだけではない、みんなのことを考えた行動 *激しいスコールの中をサメのいる海で8分間も一人で泳 いだ。よっぽど自信があったのか？ *なぜ、自分が見届けなければと思ったのだろう。淵上さ んは機長の指示に従わなければならないし、そんな義務 はないはずなのに *また事故が起きたとき、機長の指示に従わず、最後まで 残ろうとする乗務員が出るかもしれない。	・淵上さんの行動を「勇気 のあるすばらしい行動」と考 える「機長の指示に従わず 自分の命を顧みない無謀な 行動」だと考えるか、自由 に意見を出し合って話し合 いたい。 ・乗務員は機長の指示に従 う義務があることを知らせ る。 ・淵上さんにとって「乗務 員の義務」とは何のことだ ろう。
まとめ	◆自分が機長ならば、淵上さんにどんな言葉をかけるか考える ◆自分が淵上さんならどう考え、どう行動するか考える	・参考資料2を読み自分の考 えを整理する

(4) 参考資料1

歴史小説家の池田平太郎さんの「送りバント」についての文章。（「送りバント」というのは、野球で塁に出ている選手を、バッターがバントで先に送ってバッターはほぼアウトになる作戦）

（前略）先日、プロ野球OBで構成するマスターズリーグで土井氏が打席に立ったとき、「送りバント」のサインが出て、これに氏が怒った・・・という話を耳にしました。曰く、「誰だってバントなんかやりたくないんだ。でも、チームが勝つために必要だから今までやってきただけのことだ」と。
（中略）この点で、元西鉄ライオンズの豊田泰光氏がその著書の中で、「元阪神監督の吉田義男さんがフランスで野球を教えていた時のこと。送りバントを命ずると、打者が『なぜ私が犠牲にならねばならないのか。私には打ってヒーローになる資格はないのか』と訴えてきたそうだ・・・と。（後略）

(5) 参考資料2

「美しい空の勇者」では緊急事態に、機長の指示に従わず、機長や他の乗務員の脱出を確かめることが自分の義務だと考えて、最後にフカのいる海に飛び込んだ淵上さんは、危険な自己犠牲を払いました。「ロール機長は、『君は、日本の美しい空の勇者だ。』と言って、何度も何度も淵上さんをほめるのです。」という表現は、「自己犠牲」は「尊く美しいことだ」という同調圧力を子どもたちに強いているといえます。なぜ淵上さんは、自分が残ることを「義務」と考えたのかについて考え、議論する必要があるのではないのでしょうか。

(「自己犠牲」というのは、誰かを助けるために自分の労力・体・生命を失うこと)